

# 宇治川の先陣現代語訳

## 第一段

これは正月二十日過ぎのことなので、/比良の高嶺、志賀の山、/昔ながらの長等山の雪も消え、/谷々の氷も解けて、/水はおりから増している。/白浪が激しくみなぎって流れ落ち、/早瀬の川底は大きく滝のような音をたてて、/逆巻いて流れる水も速かつた。/夜はすでにほのぼのと明けて行くが、/川霧が深々と立ちこめて、/馬の毛色も鎧の色目もはつきり見えない。/このとき、大將軍九郎御曹司(義経)は、川端に進み出で、/水面を見渡して、/部下の人々の心(の中)を見ようと思われたのであるうか、/「どうしよう、淀・一口へ回るのがよいだらうか、/水の引きぎわを待つのがよいだらうか。」とおっしゃると、/島山が、その頃はまだ生年二十一歳になつた者であったが、/進み出て申し上げたことは、/鎌倉で十分この川の御研究はございましたぞ。/（御曹司が今まで全く）御存知ない海や川が、/急に現れでもしましたのならともかく。/この川は近江の湖の末流ですから、/いくら待つても水は干上がりますまい。/橋板をまた、だれが架けてさしあげることができようか。（できません）。/治承の合戦のときに、/足利又太郎忠綱は、/鬼神として（川を馬で）渡つたのですか（そうではあるまい）。/私重忠が瀬の深浅を測つてみましよう。」と言つて、/丹の党を主力にして、/五百余騎がぴつたりとくつわを並べ（て今にも川に乗り入れようとする所に、/平等院の東北、/橋の小島が崎から武者一騎が/駆けさせ駆けさせ現れた。/一騎は梶原源太景季、/一騎は佐々木四郎高綱である。/はたから見では別に何とも見えなかつたけれども、/内心では（二人とも）先陣を心懸けていたので、/梶原は佐々木より約10mほど前に出た。/佐々木四郎が「この川は西国一大河ですぞ。」/（馬の）腹帶が緩んで見えますのは（危険ですから）、/お縛めください。」と（言うと、そう）言われて、/梶原は、そのようないることもあるだろうと考えたのだろうか、/左の鎧を外側に踏ん張り、/（馬と腹との間を空けて）、/手綱を馬のたてがみに投げかけ、/腹帶を解いてしっかりと締めた。/その間に佐々木はさつと（梶原の脇を）駆け抜けて、/川へざつと

## 第二段

島山は、五百余騎で引き続いて（川を）渡る。/向かいの岸から山田次郎が放つ矢に、/島山は、馬の額を深く射られて、/（馬が）弱つたので、川の中ほどから弓を杖のよう突いて（水中に）下り立つた。/岩に当たつて砕ける波が、甲の先の部分へざつと押しかかつてきたけれども、/（島山は）気にもせず、/水の底にもぐつて向かいの岸へ着いた。（島山が岸へ）上がるうとすると、/後ろから何者かがむすと引っ張った。/「だれだ。」と問うと、「重親です。」と答える。/「おお大串か。」「そうです。」/大串次郎は、島山にとつては鳥帽子子であつた。（大串は）「あまりに水（の流れ）が速くて、/馬は押し流されました。/（私の）力が及ばないで、/（あなたに）お付き申しております。」と言つたので、「いつもおまえたちは、/重忠のような者に助けられるようだな。」/と（島山は）言うと同時に、/大串を引っかんで、岸の上へ投げ上げた。/投げ上げられて、（大串は）すぐに起き上がり、/「武藏国の大串次郎重親が、/宇治川の（徒步での）先陣だぞ。」と名乗つた。/敵も味方もこれを聞いて、一度にどつと笑つた。